

Kindai Hospital Today

KANAZAWA UNIVERSITY HOSPITAL

金沢大学病院ニュース

平成 22 年 11 月発行 / Vol.13

金沢大学附属病院 TEL.076-265-2000

〒920-8641 金沢市宝町 13-1

Vol. 13



病院長 ご挨拶

病気の超早期発見から最後の砦まで、 全てに智力を結集！

病院長 富田 勝 郎

誰にとっても病気に見舞われることは人生にとって最大の危機です。なんとしても病を乗り越え健康を取り戻したい、そう願って最高最善の医療を求めるのは、ごく自然な心の流れでしょう。そのような切実な願いに応えるべく、金沢大学附属病院は最新の知識をもとに最高・最善の医療を実践し、かつ“最後の砦”の姿を追求してきました。その具体的な姿として 10 年かけての新病院が昨年完成しました。それ以後 1 年余が経過しましたが、患者さんの評判はいかがでしょうか、職員皆さんの働き心地はどうでしょうか。スタート時の大きな不安や混乱を 3～4 ヶ月で無事乗り越え、徐々に慣れてくるにしたがって、新しい設備やシステムによる利点を実感していっているのではないのでしょうか。

この勢いを追い風にして、この 4 月からの新執行部メンバーとともに、さらに数々の懸案に具体的な道筋をつけてきました。なかでもこの半年間、皆さんとともに総力挙げて取り組んできました「病院機能評価」も、おかげさまで 6 月に、最高レベルである“V6”の認可を得ることができました。これは新病院が「ハード面だけでなくソフト(機能)面でも最高の内容を伴っている」ということを認証していただいたことになります。今後もこのレベルを維持しさらに向上していくために、「病院機能向上委員会」を立ち上げました。最前線の医療機関モデルとなり続けられるよう、皆さんとともに努力していきたいと思っています。

一方で、救急部 (ER)、集中治療部 (ICU の増床) の充実と拡大、周産母子センター (MFICU, NICU, GCU) の

組織再編など、さらなる充実に向けても進行中です。

また 7 月には新設「金沢先進医学センター」がオープンし、サイクロトロン稼働と、全国で初めて導入された最新・高精度の PET-CT による診療が順調にスタートしました。また病院内に新設しました「疾病予防センター」の傘下で、いよいよ今秋から待望の「高次元・人間ドック」(仮称スーパードック) が先進医学センターでスタートします。今後、各診療科の英知を結集してこの施設を充実させ、全国に先がけて病気の超早期発見と予防の分野を開拓していき、金大附属病院は、病気の「超早期発見」から「最後の砦」まで全てに全力を尽す、という姿勢を示していきたいと思っています。

一方、国・県の要請を背景とした「石川県地域医療再生計画」の一環として、「医療シミュレーションセンター(仮称)」の設置を検討中です。将来ここをキーステーションに若き研修医のレベルアップや地域医療機関との連携支援を図り、北陸圏の“医療の要”の役割を強化していきたいと思っています。

以上、金大附属病院の使命はいうまでもなく、最高の臨床・教育・研究を遂行していくことです。また地域医療の支援も期待されています。そのためには医師・看護師・薬剤師ほか各職種の“高度の医学的知識、最新の医療技術、豊富な経験の蓄積”を基にした医療が不可欠です。この理想的な医療に向かって、“医は仁術”に始まる“医の心”を胸に抱き、堅実に一步一步前進し続けようではありませんか。皆さんの御協力、御支援をよろしくお願いします。

副病院長紹介



広報・地域医療連携担当副病院長

太田 哲生

私は、この度、病院長の富田先生から“広報・地域医療連携担当”の副院長を拝命致しました。本院は、昨年の5月に新外来・診療棟が完成し、今年の7月からは金沢先進医学センターとの連携で、国内最先端のPET-CT検査が活用できるようになりました。さらには、“疾病予防センター（金子周一教授がセンター長を務める）”が開設され、高次人間ドッグの開設とともに、“病気になるための予防医学”にも積極的に取り組むなど、今まさに金沢大学附属病院が新しく生まれ変わろうとしています。このように、

本院が北陸の拠点病院として“安全・安心で最先端の医療”を提供し、さらには“地域住民の健康増進”にも深く関わっていくためには、“顔の見える地域連携の構築”が極めて重要になります。従いまして、病診連携や病々連携はもとより、“地域住民との連携”という面にも目を向けて、今後の活動を行っていく必要があると考えています。そのためにも、病院スタッフの皆様方と力をあわせて頑張っていきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願い致します。



診療担当副病院長

金子 周一

この4月から副院長を拝命しました。そこで診療担当副院長が関係する仕事は何かと調べました。大学病院の理念でいう“最高の医療を提供する”、基本方針で言えば“質の高い医療の提供”に関わることだとわかります。しかし、これらは病院で働く皆様がいつも心がけて実行しておられることです。そうすると、私の仕事は皆様が実行しておられることに支障がないようにお手伝いをすることであると思います。特に、附属病院が行う診

療の全体にかかわる課題であるとか、各診療科や診療部を横断するような課題など、個々では対応しにくいことを行うことが仕事となります。拝命して、すでに5ヶ月が過ぎようとしています。本来は、病院が掲げる理念に従い将来を見据えて行動することが重要なのですが、実際は日々生じる問題に対応しているだけというところです。富田院長のもと、より良い附属病院の診療に少しでも貢献出来ればと考えています。宜しくお願いします。



人事・労務担当副病院長

三邊 義雄

4月より人事労務担当の副院長を担当させて頂いております、精神科の三邊（みなべ）と申します。私は昭和53年に本学医学部を卒業し、直ちに精神科を専攻致しました。しかし、母校の大学病院に勤務医として在籍したのは、大学院生としての最初の4年間と教授としての最近3年半、計7年半のみでございます。その間の約25年間は外部の大学病院や一般病院に勤務しておりました。

久しぶりに勤務させて頂いた金沢大学病院は、“すばらしい”の一言に尽

きます。特に単独型で患者さんに配慮した設計の精神科の北病棟は、外部からの見学者の賞賛の声が今でも絶えません。また新外来棟のオープンに合わせ勤務させて頂いているのは、幸運としか言い様がありません。

私自身が久しぶりの母校勤務で慣れないことが多く正直戸惑いもあるので、他の職場で勤務した経験を生かして、母校の大学病院の発展のためお役に立てればと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



安全管理対策担当副院長
濱田潤一郎

—医療事故防止から医療安全確保へ—

医療安全管理部部長の濱田です。医療事故の報道が、毎日のように新聞やテレビをにぎわしています。突然、医療事故が急増したのではなく、技術と機器の高度化・複雑化・高速化によって、いままでは不可能であった治療が可能になったことによって、医療事故を引き起こしているのだと考えられます。医療事故は単に医療界だけの問題ではなく、社会問題となっていますので、わたしたちの附属病院も医療事故防止を真剣に検討、対応し、安心と信

頼を得なければなりません。

しかし、医療事故防止対策とする限り、医療事故を防止することは困難であり、医療の安全確保という観点が必要です。安全確保のためには、医療事故を防止する、なくすという観点ではなく、より積極的に、質を向上するという努力が基本になると思います。そのために、病院機能向上委員会と一緒に、附属病院のすべての職員を含めた医療安全確保を考えていきたいと思えますので、みなさまのご支援をよろしくお願いいたします。



臨床教育・研究担当副院長
杉山 和久

私は、2010年4月より2年間の任期で金沢大学附属病院の副院長（研究・教育担当）を拝命しました杉山和久と申します。

1984年金沢大学医学部卒業で、2002年12月より医学系視覚科学（眼科）教授、附属病院眼科長を務めております。緑内障を専門として、これまで多くの患者様の治療に携わってまいりました。

今までは、眼科学教室を発展させる

ことに全精力を傾注してまいりましたが、今後は附属病院をさらに良くするにはどうすべきかを常に考えて行動したいと思えます。研究と教育が担当ですので、新薬の臨床治験、医師主導の臨床研究が行いやすい環境の整備、研修医が多く集まる教育内容の充実した金大病院になれるように取り組んでいきたいと思えます。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。



経営管理担当副院長
長瀬 啓介

附属病院は教育・研究の基盤として診療を提供していますが、この診療に伴い使われる医薬品・医療材料・設備・施設に要する費用や診療収入は規模が大きく、金沢大学全体の財務上の少なくない部分を占めています。金沢大学の教育・研究の発展のためには附属病院の経営が安定であり続けられるように常に配慮をしていく必要があります。

附属病院の金沢大学でのミッションと附属病院の経営全般のバランスに必要な方向性を見出すことで、金沢大学附属病院の協調した発展のため、任期中多少なりともお役に立ちたいと願っています。

副病院長紹介



薬剤担当副病院長
宮本 謙一

—薬品の適正使用、安全管理のために薬剤師がいます—

近年は、分子標的薬を始めとして切れ味鋭い医薬品が続々と上市されてきております。加えて本院では1,600品目を超える医薬品を採用しております。しかし、薬は「効果」という良い面と「副作用」という悪い面を併せ持っています。薬を服用しないと病気は治りませんが、使い方を誤ると「凶器」にもなります。“薬は両刃の剣”

と言われるゆえんです。医薬品の適正使用と安全管理に十分留意していただきますようお願いいたします。つきましては、薬のみ方や使い方、その他ご心配なことがありましたら、遠慮なく薬剤師にお尋ねください。患者さんが安心して療養できますように、また、医療従事者に対しても薬物療法のチェックならびに相談相手として、常に皆さんのそばに薬剤師がいます。



看護担当副病院長
小藤 幹恵

看護担当副病院長の立場から、院内各部門と連携し、心あたまる看護を看護職員の働きを通して充実させていきたいと考えております。

本年度は、出産前後のお母様やお子様への医療体制の充実が図られ、新生児集中治療室に加え、母体・胎児集中治療室と新生児回復治療室が新たに開設されました。専門性の高い助産師や認定看護師による手厚い看護体制が整うところとなりました。また、外来部門では昨年新築の際に導入された患者係の皆さんとの連携も円滑化し、処置室や相談室、説明室での看護を高めてきております。中でも、糖尿病相談室、肝炎外来での相談機能、乳腺科外来等でのがんカウンセリングでは、チーム

医療を基本にして、療養・闘病における患者様の疑問や気になることを話合うことを重視した看護を始めています。入院病棟では、専門看護師も活躍し、人工呼吸器を装着している患者様の入浴も行われ、回復と心地よさを感じていただく機会を一層充実できるようになりました。

医療安全の点からは新電子カルテの活用により、注射点滴時の確認や医師指示の範囲にIT化を活かした取組みを院内一丸となって行い、ヒューマンエラーの防止体制を強化しています。

今後も、傍らにいる身近な立場の看護により患者様の療養に役立っていただけるよう努力したいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。



事務担当副病院長
伊藤 健一

この4月に改めて事務担当の副病院長を拜命いたしました。

今年度は第二期中期目標・中期計画がスタートし、地域医療機関との連携の強化、医療スタッフのキャリアアップ、病院経営の効率化等新たな目標に向けて計画を実施していく為の大事な年となります。

また、6月には病院機能評価(Ver.6.0)の認定も受け、さらなる

病院の機能充実に向けて病院長の強いリーダーシップの下、事務部門として最大限の努力をして参りますのでご協力の程よろしくお願いいたします。

病院機能評価 Ver.6 合格！！

去る6月4日、日本医療機能評価機構より、平成22年3月2日～5日に受診した病院機能評価（Ver.6）の認定書が届きました！！（パチパチby拍手）

前回の資料が見当たらず、ほぼ一からのスタートとなった今回。しかし結果は見事一発合格。



受審が迫るにつれて焦りも見られましたが、タスクフォースリーダーの山崎雅英先生を始め作業部会が中心となり、病院全体で一生懸命取り組んだ結果だと思えます。

しかしながらここで終わるのではなく、今後より一層レベルの高い医療を提供するため、また、よりよい医療を提供するため、スタッフ一同一層努力していくことが大切だと考えます。

卒後看護臨床研修が開始となりました

新人看護職員臨床研修は、看護協会や厚生労働省などで30年前近くから検討されてきました。平成21年7月9日に、「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律案」が可決・成立し、平成22年度より、卒後看護臨床研修が努力義務化となりました。新人看護職員が、基礎教育に加えて臨床看護実践能力を職場内教育により不安なく習得するものであり、就職後の1年間をしっかりとサポートする制度です。

当院でも、早くから目指す看護師像を明確にし、新人看護職員の育成に取り組んできました。大学病院として質の高い看護を提供するために、屋根瓦式の研修体制を更に発展させた相互成長支援体制を3年前から整え、また、教育担当者（安全教育専任看護師）も育成してきました。この相互成長支援体制は、新人看護職員教育の中で、全ての看護職員に役割があることが特徴的です。それは、新人看護職員に、各看護職員が成長過程において指導的役割を担当し、効果的に関わり、その役割を通して相互に成長するものです。2年目看護師についてもバディ（仲間）という役割を設けて研修を企画し、指導・教育を行っています。

4月から、更に新人看護職員研修の内容の充実に努め、メンタル支援、看護技術、個人情報保護、電子カルテ、医薬品情報などについて他職種の協力も得て実施しました。

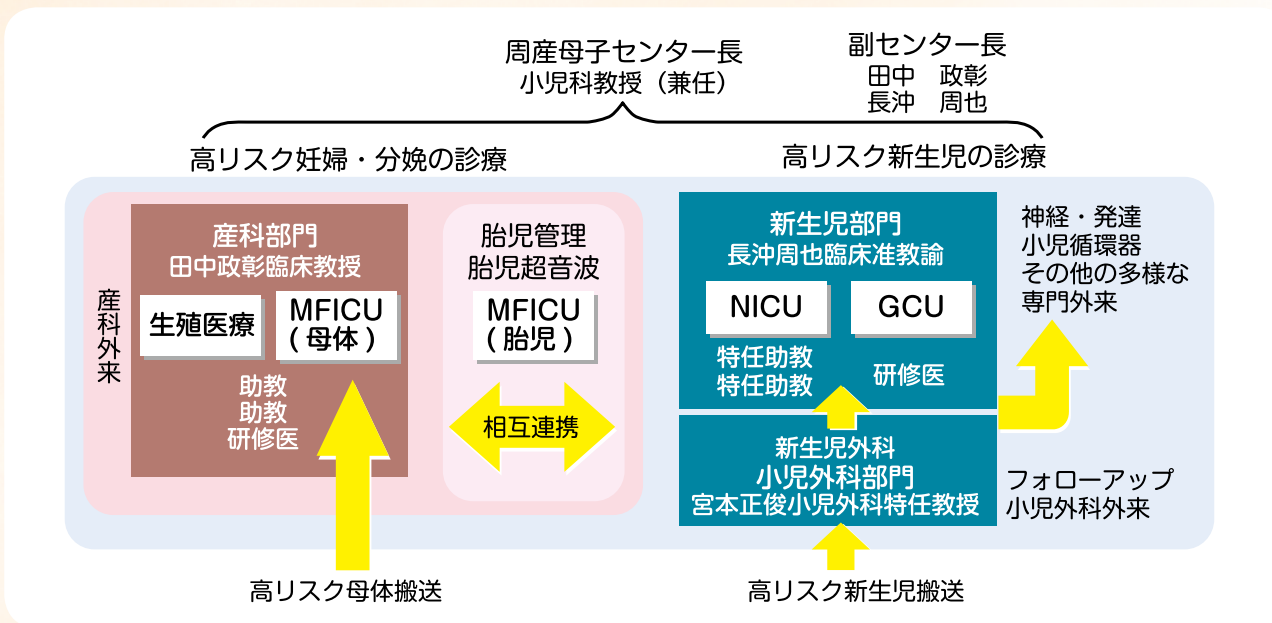
将来を担う新人看護職員を育成するため、大学病院でしか取組めないような教育システムや新人看護職員の希望を考慮しながら研修プログラムへと進化させていきたいと思っています。

周産母子センターの未来図

金沢大学附属病院周産母子センター長 谷内江昭宏

周産母子センターが装いを新たにしてスタートいたしました。私自身、30数年前のまだ駆け出し小児科医の頃、富山県の大病院で初めて新生児・未熟児医療に携わった時のことを思い出します。十分な機器もまだなく、1,000グラムに満たない未熟児を救うことなど困難な時代でした。「小さく生まれたら、一晩暖かい風呂場に寝かせておいて、翌日まで生きる力があつたら本格的な治療を始めたものだ」と、嘘のような伝説が生きていた時代でした。その頃に比べたら、現在の未熟児・新生児医療のレベルは隔世の感があります。今は、手のひらに乗るように小さく生まれた赤ちゃんであっても、実に細やかな、洗練された治療が施されています。

金沢大学周産母子センターがここまでくる道のりは、決して平坦なものではありませんでした。当初は、産科病棟の片隅でひっそりと新生児医療が始められました。スタッフの数や設備も十分でない中で、それでも北陸の新生児医療の一翼を担う場となったのは、小さく生まれた子どもたちをなんとか健やかに育てたいと願う、現場スタッフの強い思いと努力の積み重ねがあったからです。これからは貴重な仕事の経験と成果を、未来のスタッフに正確にバトンタッチするために、教育・研究機能も持つセンターに成長させる必要があります。そのような周産母子センターの未来図を描くべく、産科部門、新生児部門そして小児外科部門が力を合わせて努力を続けたいと思っています。



平成22年 消火技術競技大会に参加しました



9月2日、まめだ簡易グラウンドにおいて、金沢市主催による平成22年消火技術競技大会が行われ、院内防火意識の高揚のため、今年も附属病院から屋内消火栓の部に事務部と看護部から各1チーム、一人操作屋内消火栓の部に看護師2名が参加しました。

競技では、選手全員が日頃の研鑽成果を遺憾なく発揮し、迅速かつ的確な消火技術を披露しました。

その結果、屋内消火栓の部では見事優勝・準優勝を収めました。

重症患者を一人でも多く一般病棟へ

金沢大学附属病院 集中治療部 部長 谷口 巧

金沢大学附属病院集中治療部について話をさせていただきます。集中治療室は現在8床のベッドをもち、救急、麻酔、循環器内科、消化器内科、消化器外科、脳神経外科、整形外科専門医の資格を有する専任医師8名と、看護師25名で365日24時間、重症患者の管理を行っています。石川県では唯一の日本集中治療医学会専門医認定施設です。

<集中治療室への入室について>

集中治療室には、くも膜下出血、脳出血等の中枢神経系、急性心筋梗塞、急性心不全等の循環器系やARDS、肺炎等の呼吸器系、重症膵炎、劇症肝炎等の消化器系といった重篤な機能不全を有する患者、又は、生体肝移植術、食道癌手術、大動脈解離に伴う手術、脊椎全摘術といった大手術後に重篤な機能不全に陥る可能性の極めて高い患者を収容しております。さらに、交通事故等により生じた多発外傷、急性薬物中毒や熱傷患者にも対応しています。2008年には、554名の患者が入室し、うち大手術後や敗血症といった院内からの入室が194名(35.0%)であり、他院からの紹介や外傷等による救急搬送で来院する院外からの入室が360名(65.0%)であり、院外からの患者を数多く引き受けています。全科にわたり重症患者を入室しており、患者の年齢も年齢制限はなく0歳から104歳まで幅広く受け入れています。

<集中治療室での治療法について>

集中治療部で行われている治療法としては、各種薬剤療法はもちろんのこと、呼吸不全等に対して行う人工呼吸管理、腎機能障害や肝機能障害等に対して行う持続的血液ろ過透析(CHDF)、血液透析、血漿交換療法といった血液浄化療法、心不全等に対して行う大動脈パルーンポンピング(IABP)や経皮的心肺補助(PCPS)などの機械的補助療法を用いています。

集中治療部は、「重症患者を一人でも多く一般病棟へ」をスローガンに、日夜努力しています。



臨床研修医の紹介



奥田 理香

金沢大学附属病院での研修が始まって、早いもので約5ヵ月が経ちました。自分にとって新しい病院で、右も左もわからない状況で、緊張と不安だけで初期研修がスタートしましたが、指導して下さる先生方、病棟の看護師さん方にお世話になりながら、最近少しだけ慣れてきたように感じています。

指導して下さる先生方には、ご迷惑をおかけしていることが多いにもかかわらず、丁寧に指導していただき、とても感謝しております。これからもいろいろな科に回らせていただきますが、少しでも多くのことを吸収し、知識を増やし、経験を積み努力していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



須田 烈史

私が金沢大学附属病院の研修医となり5ヵ月が過ぎようとしています。

「生と死」が行きかう病院では、自分なりに考えることが多い濃密な研修を送っています。「どのように自分を社会に役立てるべきか？」はまだ決まりませんが、常に「自然体」ですべてを受け入れられる人間になれるように研鑽を積んでいきたいです。



武田 直也

研修が始まって5ヵ月近く経ちました。国試浪人として予備校での座学の日々だった去年とは打って変わって、患者さんの診察や指導医・看護師さんの call に、連日院内をかけずり回る日々です。慌ただしい毎日ですが、医師になれたからこそのものでからとても幸せな事だと思います。

まだまだ至らぬ所だらけの私ですが、こんな私に研修をさせて下さる金大病院の皆様には、本当に感謝しています。これからも1日1日を大切に、人としても医者としても成長できるよう、精進して参ります。



松島絵里香

早いもので、研修が始まってもうすぐ5ヶ月が経とうとしています。少しずつ研修生活にも慣れて来ましたが、日々、自分の未熟さに気付かされ、もっともっと勉強しなければと思う毎日です。そんな私を支え、様々なことを教えて下さる指導医の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。

また、共に研修している研修医の存在は大きく、同期とは励まし合い、先輩からは様々なアドバイスをいただいたり、時には相談に乗っていただいたりして、精神面での支えとなっています。この2年間の研修生活で、沢山の経験をして、様々なことを学びたいと思います。



圓山 泰史

医師になり早くも5ヶ月が経とうとしています。

病院で医師として働くためには、医学の知識はもちろんのことたくさんの業務も覚えなければならず、慣れるのに一生懸命です。

そんな中で同じ研修医の仲間同士で教え合ったり、励まし合ったり、笑い合ったりする毎日です。7月から専門コースの多くの友人が外病院に行ってしまいましたが、同じ金大病院の研修医として応援すると共に自分も負けずに頑張ろう、なんていう事を考える今日この頃です。



下村 修治

研修医となって早5ヶ月が経ちました。医師としての生活は学生時代に思い描いていたよりも大変なもので、多くの人のお世話になりながら過ごしてきました。学生時代には行わなかったことも多く指導医の先生はもちろんのことメディカルの方々にもいろいろとご指導を賜りながら、研修を行っております。

自分には出来ないことばかりで落ち込むことも多々ありましたが、指導医の方々や同期の研修医、そして患者様に励まされながら何とか今までやってこれてきました。これからも少しでも患者様の役に立てるように研修を頑張っていきたいと思えます。



八子誠太郎

研修医としての生活が始まって5ヶ月が経ちました。私は他大学出身で新たな環境に飛び込むという不安もありましたが、今では友人もでき楽しい研修生活を送っております。また、医師としてはまだまだ駆け出しでわからないことだらけですが、指導医の先生方は親切で、手取り足取り教えていただき、充実した毎日です。

大学病院はローテーションに関してかなり融通が利き、研修も一人一人の患者さんに関してじっくり考え、基本的な手技や考え方を身に付けるにはとてもよい環境だと思います。

まだまだ未熟者ですが、今後もこの恵まれた環境を生かし、さらに日々の努力も忘れず、大学病院での研修を実のあるものにしていきたいと思えます。



齋藤 七生

金沢大学病院での研修ももう5カ月がたちました。

母校とはいえ、わからないことだらけで右往左往する毎日ですが、先生方、メディカルの方々、事務の方々、同期の仲間…周りの方々のおかげでなんとか日々の生活が送れています。

医師として、社会人として、恥ずかしくないよう、毎日少しずつではありますが、成長していきたいと存じます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

平成22年度ふれあい看護体験

21世紀の高齢社会を支えていくためには、相手の立場に立ちお互いを思いやる心、助け合いの心を、私たち一人一人が分かち合うことが必要です。こうした心を、老若男女を問わず、誰もが育むきっかけになるよう、旧厚生省により「看護の日」が1990年に制定されました。

看護の日は、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ、5月12日に制定され、この看護の日を含む1週間を看護週間とし、その間に様々な行事が全国で催されます。また今年は制定20周年の記念すべき年でもありました。

金沢大学附属病院では、石川県看護協会が企画する「2010年ふれあい看護体験」を受けて、5月8日(土)に「ふれあい看護体験(親子)」を実施し、2組の親子が体験しました。また5月11日(火)には、「ふれあい看護体験(一般)」を実施し、5人の高校生が参加し体験しました。

親子の看護体験では、小学生の女子とお母さん、中学生の女子とお母さんの2組でした。それぞれに白衣を身につけ、病院長より1日看護師の辞令を受け、やや緊張しながらも看護体験ができる期待で目を輝かせていました。病棟では血圧測定や患者さんの足浴など体験し、テレビなどで見る医療機器を目の当たりにした感動や、患者さんと触れ合うことで気付いた優しさや心配りの大切さなど学ぶことができたとの感想を聞くことができました。

高校生(女子)5人の看護体験では、それぞれに白衣を身につけ、身なりを整え、辞令を受けたことで気を引き締めている様子が伺えました。2人ずつのペアで3つの病棟で体験をしましたが、血圧や体温の測定、リハビリへの車椅子での送迎や洗髪など、やはり患者さんとの触れ合いを通して5人とも看護師・医療従事者になりたいという思いが強くなったとのことでした。毎年行っている「ふれあい看護体験」の機会を活かして、看護の仕事や相手を思いやる看護の心を、社会に、より多くの方々に伝えていきたいと考えます。

11日(火)は、看護の日に関連して、毎年院内で「ふれあいコンサート」も企画されており、今年は医師・看護師・薬剤師など様々な職種の方々が、楽器や歌を披露しました。看護体験者も患者さんと共に、癒しの時間を共有して過ごすことができました。



シャンプーを寄付いただきました

8月11日、株式会社彦田 代表取締役彦田昭雄様から入院患者の療養環境向上のためにご利用くださいとシャンプー1000本の寄付をいただきました。

彦田様には病院長より「病院への寄附は大変ありがたく、大切に利用させていただきます。」と感謝状が送られました。



Kindai Hospital Today
vol.13

編集・発行 金沢大学附属病院 病院広報紙編集委員会
(事務担当：総務課 調査・広報係)
TEL 076-265-2936 FAX 076-234-4320
皆さまからのおたより、ご意見をお待ちしております。